

＜感想＞ 前半4ヶ月では、スピーキングとアカデミックライティングの授業ならび

にゲーム理論を用いたコンフリクト分析の授業を履修した。前者は英語以外を母国語とする学生が履修する授業だったので、いろいろな人がいるカナダのなかでも特に国際色が豊かでおもしろかった。後者は普通の授業であるが、講義形式であっても旺盛な質疑応答が行われたり、2～3人でグループを組んでプロジェクトに取り組んだり、充実した内容であった。カナダにおけるいわゆる講義をベースとした授業というものの要素を一通り含んだ授業であったように思う。なお、この授業でできた現地の友人は後に来日し、大阪を案内することができた。

後半では、やや趣向を変え、セミナー形式の授業を2つ履修した。一つは研究の成果を社会においていかに活用するかという授業であった。軽い講義、先生によって指定された課題論文の発表とそれについての議論、そしてグループでのプロジェクトといった三本立てで、充実していた。抽象的な議論も多く、意思疎通に苦労したが何とかやり遂げた。もう一つは、コミュニティに関する授業であり、毎週多くの論文を読んで、その内容を授業時間中に議論するほか、授業の参加者たちのコミュニティに関する記憶を書き出し、それについて議論するという2本立ての授業だった。課される論文量が多かったので、なかなか大変であったが、参加者が個性豊かであり、議論は楽しかった。内容が非常に充実していた分、もっと英語ができれば、と悔しい思いをすることの多い授業であった。

授業以外では、日本に興味のある人が集まるサークルなどに参加し、毎週の企画を考え、実行するなど、積極的に発信を行った。また、地域のイベントなどにも努めて参加し、カナダのウォータールーという地域において暮らしている人々の生活感を体験しようとした。なお、前半は大学の寮で暮らしていたのだが、後半はホームステイを行った。週末に教会の行事などに連れて行ってもらったり、話をしたりすることなども、地域の暮らしを感じる助けになった。このほか、休暇を利用してケベックやキューバに旅行に行くなどして見聞を広めることもできた。

以上、留学を通じたさまざまな活動によって、語学力の向上やチームを組んで仕事をする経験の蓄積などスキル面での向上があったほか、カナダという海外を生活者の視点から体験することによって、日本と違った社会の仕組みを少し知ることができた。また、それと日本を比べることにより、日本の特質に関する理解も深まった。これらの経験が今後どう影響してくるのかは未知数だが、多くを経験でき、ひとまず無事に留学を終えることができたように思う。

最後に、留学中も、帰国後も、多くの人々に支えられてこそ、このような経験が可能になっているということをひしひしと感じてきたということを申し添えておきたいと思います。お世話になった方々の名前をすべて挙げることはできませんが、この場を借りて、今回ご支援いただいた京土会と会の活動を支えていらっしゃる皆様に深く感謝申し上げます。